

Title	言語文化学 Vol.10 編集後記
Author(s)	高岡, 幸一
Citation	大阪大学言語文化学. 10 p.320-p.320
Issue Date	2001-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78016
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

編集後記

本号は「言語文化学会」創立後 10 周年にあたる節目の号である。別に 10 周年記念号特集号としたわけでもないが、例年と同じくさまざまな分野から論文が集まった。全国的に「言語文化学」という名称が各教育・研究機関に散見される現在においても、その機関誌が 10 周年を迎えたケースは他に少ないであろう。したがって、10 年単位でひとつの機関誌の歩みを総括した場合、その専門とする「言語文化学」なる学問分野の性格や現状が浮かび上がるものとして斯界の発展に一助をなすものと自負しうるのであろう。創刊時に 154 ページであったものが vol.9 では 285 ページとなり今回 vol.10 では雑誌のサイズも B5 版となり 320 ページと大きくなった。

編集の段階では、例年と同じく助手の皆さんや編集委員の教官および院生諸氏のご努力を結集し、さらに査読を依頼した各教官の方々のご配慮を得て発刊へと辿り着いた。ただ、ここまでに至る何回かの編集委員会の席上でも各段階で色々と議論が出たことではあるが、年々投稿希望者数の増加にともない、レフリー制における評価基準をも含め、編集方針規定の詳細な点を再考慮する必要性も生じつつある。本年度は「言語文化学会」の大会とも呼応して OB の院生も交えて同窓会の発足会が開催され、さらに多数の学会員の投稿も今後予測されうる。諸規定の整備もさることながら、学会誌を名実ともに高質なものへと飛躍させるターニング・ポイントでもある。

過去 10 年間の間に院生諸氏の研究分野も様々に変化し、多様化した面もある。時代の流れという要因も考えられる。そこで今どこかで一度立ち止まって「われわれの言う言語文化学」とは何か、みんなで考えてみるのも一案かも知れない。そのような場にこの「言語文化学会」が、パネルディスカッションなり、機関誌特集号なりの形でも、協力できればと思う。(高岡幸一)

2001 年 3 月

編集委員会

編集委員

高岡幸一（委員長）、尾崎久男、小門典夫、田中美英子、ヨコタ村上孝之
今泉志奈子、大平未央子、宮西久美子、藪内 智
石丸久美子、小池隆太、鈴木清香、竹山直子、船津英志